

編集後記

新しい検査法が開発されると、その対象となる臓器や疾患が新しく見なおされて、驚異的進歩をとげるものである。胃における早期癌がその典型である。胃に続く十二指腸および膵が内視鏡検査の対象となり、内臓の暗黒大陸と思われていた膵臓が新しく見なおされて来ている。

膵疾患には膵炎と膵癌があるが、この2つの膵疾患の展望が2回にわけて特集として試みられた。本号では、膵炎を中心に、膵疾患の生化学検査、膵炎の診断と治療、さらに膵炎の病理について、現在活躍されている諸先生にお願いし、膵炎に対する各方面の進歩と展望が詳細にのべられて、膵炎の現況が把握しうるものと思います。更に主題症例としてホルモン産生性膵島腫および家族性膵石症がとりあげられ、また研究に内視鏡による経十二指腸的 needle biopsy があり、座談会で膵疾患診断の問題点が詳細に検討されている。従来から比較的兴趣の低かった膵疾患に対し、日常診療の面から、身近なものとなってくことを希望したい。胃の出血性ピランについて6施設から共同して報告されている。共同研究の新しい行き方をしめしていると思います。小腸のX線検査で十二指腸には hypotonic duodenography がルーチン化されているが、空腸一回腸のX線検査はなかなか容易でない。経ゾンデ法による小腸X線検査の方式が報告され、今後小腸の検査に有用になるであろう。

<高木 国夫>

<編集> 早期胃癌研究会